生体腎移植のドナーが「イエス」と言うとき
― Viktor E. Frankl『それでも人生にイエスと言う』を援用して―

山　本　典　子

I．はじめに

Viktor E. Frankl の代表的な著作のひとつである『それでも人生にイエスと言う』（…Trotzdem Ja zum Leben sagen）の表題は、ナチス・ドイツのブーヘンヴァルド強制収容所で歌われた歌の一節であるという。

人は生きていく中で、しばしば受け容れがたい苦悩に満ちた現実に向き合うこととなる。災害、事故、病気、親しい人との死別、人間関係のもつれ、経済的な破綻…といった苦悩の中には、自らの行いがその結果を招いたといえるようなものもあるし、「なぜ私が…」と言いたくなるような理不尽で且つ抗いがたい大きな運命の波に飲み込まれてしまったかのように感じられるものもある。何か手立てを講じて免れることができる事態もあれば、不可避で無力感に苛まれるような災厄もある。しかし、いずれの場合であっても苦悩に屈することなく、苦悩の存在を認め、「それでも人生にイエスと言う」姿勢を貫くことで、人は人として価値ある人生を生き抜くことができるのである。

筆者は臨床心理士として生体腎移植の患者およびその周囲の人々と出会うなかで、彼らが自らの運命や選択を様々な形で「イエス」と肯定する姿を目のあたりにしてきた。本稿では、Frankl の論じる人生の意味や価値について概観し、その思想を生体腎移植のドナー（腎臓提供者）の生き様に重ね合わせて、彼らが「イエスと言う」ことについて考察を試みている。

II. Frankl の見いだした意味

Frankl は、人生の意味について、精神科医としての臨床経験の他に、彼自身のテレージェンシュタット、アウシュビッツ、カウフェリング、デュルクハ

イムの各強制収容所における体験に基づいて論じている。死と隣り合わせの極限状態で理不尽な運命を受け入れ、生き延びてきたFranklが達した境地から論じる人生、犠牲、苦悩といったものの意味は、生命の危機や大切な人との別離など大きな苦悩に直面する人間すべてに共通するものであり、生体腎移植のドナーが感じ、そして問う人生、犠牲、苦悩の意味を読み解く上で有用であると考えられる。

Franklの生きる意味や価値に関する思想を語る上で、「人生の意味への問いに関するコペルニクス的転回」と呼ばれる考え方が欠かせない。

> それは、ものごとの考えかたを180度転換することです。その転換を遂行してからはもう、「私は人生にまだなにを期待できるか」と問うことはありません。いまではもう、「人生は私になにを期待しているか」と問うだけです。（中略）私たちが「生きる意味があるか」と問うのははじめから誤っているのです。つまり、私たちは、生きる意味を問うてはならないのです。人生こそが問いを出し私たちに問いを提起しているからです。私たちは問われている存在なのです。私たちは、人生がたえずそのときそのときに出す問い、「人生の問い」に答えなければならない、答えを出さなければならない存在なのです。（Frankl訳書　1993, 26-27頁）

筆者は拙稿（2011）において、C.G. Jungの著書『ヨブへの答え』を援用し、人間であるヨブが神に与えられた理不尽ともいえる運命について、神に「なぜ」と問いかけるのをやめて、主体的に自らの運命として受けとめることについて論じている。与えられた運命を受けとめることで運命自体を変容させていくヨブの姿勢はFranklの「コペルニクス的転回」論と共通するところがあるものと考えられる。

Franklは、人間は「活動することによって、また愛することによって、そして最後に苦悩することによって」（訳書　1993, 37頁）人生を意味のあるものに、自分なりに形成することができると述べている。そして、人生が人間

に投げかける問いは、その瞬間、その人によって全く違うので、「重要なことは、自分の持ち場、自分の活動範囲においてどれほど最善を尽くしているかだけだ」（訳書　1993，32 頁）というのである。

また、Frankl は、生きる意味について「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」の３つの価値によって説明している。「創造価値」とは、「なにかを行うこと、活動したり創造したりすること、自分の仕事を実現することによって」生じるものと定義される。「体験価値」とは、「なにかを体験すること、自然、芸術、人間を愛することによって」生じるものと定義される。そして、「態度価値」とは、「自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるか、その事実にどう適応し、その事実に対してどうふるまうか、その運命を自分に課せられた『十字架』としてどう引き受けるかに、生きる意味をみいだすこと」によって生じるものと定義されている（Frankl 訳書　1993，72-73 頁）。この第三の価値は、まさにヨブが神に示した態度と同じで、不可避の苦悩に満ちた運命を受けいれ、それに対して毅然とした態度をとることによって実現されるものである。それは、喜びに満ちた創造価値、体験価値を実現することができない場合でも、苦悩をも含む運命をあるがままに引き受け、肯定することによって生じうるものである。よって、ここで得られる人生の意味とは、求めて答えの得られる意味ではなく、場合によっては有意味や無意味といった範疇を超えた「超意味」（Frankl 訳書　1993，112 頁）としかいいようのないものからの問いかけに気づき、積極的に引き受けることで達成されるものといえるであろう。

III. 生体腎移植のドナーがイエスと言うとき

生体腎移植は、腎不全の状態にある患者（臓器受容者。以下、レシピエントとする）に対し、健康なドナーが２つある自らの腎臓のうちの１つを提供することで成り立つ医療である。ここに従来の病人を病から救うために行われてきた手術とは違った状況がある。病を抱えた人の治療という目的は同じくしてい

るが、生体腎移植の場合は、健康体であるドナーの身体にメスをいれるという特殊性があるのである。また、臓器移植は基本的には臓器を代替する以外に治療法がない場合に行われるが、臓器不全のなかでも腎不全には透析治療という生命を維持しうる代替手段があり、必ずしもすぐに移植手術を行わなければならないわけではない場合も多い。移植、透析ともにそれぞれのメリットとデメリットがあるが、合併症の危険性や生活の質（quality of life. 以下、QOL とする）の観点から、移植が望ましいと考える患者が多い。

このような状況のもと、生体腎移植はまずドナーの腎提供が自発的なものであることが絶対条件となっている。よって、移植前には必ずドナーとなる人のゆるぎない意志の確認が行われる。ここで、ドナーが「イエス。私が自分の意志で腎臓を提供します」と、自発的な腎提供の決意を確信し、肯定することが、移植の実現の大前提となるのである。つまり、ドナーの「イエス」が移植の出発点となるのである。

生体腎移植は原則的には親族（6 親等内の血族、配偶者、3 親等内の姻族）間で行われることとなっている。かけがえのない家族の一員を救うためという目的があっても、ドナーになるという決断に至るまでには容易ならざる過程を経るであろうことは想像に難くない。また、決断の段階では自らの選択がゆるぎのない自発的なものであることを確信していても、その後の経過の中で迷いが生じたり、自分の決断に自信がもてなくなったり、ときによっては後悔することもありうる。移植前後にドナーが自らの選択について、容易に「イエス」と肯定できなくなる局面が生じる場合があり、そのことが生体腎移植にまつわる様々な心理学的な問題に大きく関与することが先行研究でも述べられている（安藤、尾崎 1990、春木 1995、Hilton ら 1994 など）。

或いは、移植後に一度は自らの腎提供という行為に対する後悔や不安などの否定的な気持ちにさいなまれながらも、「それでも、やっぱりやってよかった」と、遡る形で再び肯定するに至るドナーもいる。

家族の一員に腎不全という理不尽な運命ともいえる病が与えられ、治療法として腎臓移植が望ましいという判断がなされた瞬間から、ドナー（となる人）

に対する人生からの問いかけが始まる。ここで、ドナーになるかならないかという問いかけに対して、「イエス。私が私の意志で腎臓を提供します」と答えた者のみがドナーとしての道を歩み始める。かけがえのない家族の一員に対して、かけがえのない自らの身体の一部を提供するという決断は軽々しいものであってはならず、この後、生体腎移植のドナーとしての人生を歩むことへの責任を負って生きていく覚悟を要するものである。しかし、身近な人の危機的状況においては自分のできる最善を尽くしたいと思うのが人間の性であり、多くのドナーが肉体的にも精神的にも大きな犠牲を伴うことを承知の上で、「レシピエントが元気になれるのなら、何でもできる」、「私の腎臓が役に立つと思うだけで嬉しい」、「ドナーになれることが私の最大の喜び」などと言って腎提供を決断する。この段階でドナーは、自らのかけがいのない人を愛し、その愛ゆえに自らの身体の一部を犠牲にすることを決断し、そして手術台に上がるということを通して、Frankl の言葉でいう「創造価値」と「体験価値」とを満たしているといえるであろう。或いは、先行研究でも示されているように、意識的にせよ無意識的にせよ、ドナーの自責感や罪悪感（「私がこの子をこんな身体に生んでしまった」、「もっと気をつけてあげていたらよかった」など）の防衛、レシピエントとの共生関係の強化、自己の名誉の獲得などが腎臓提供の契機となっている場合もある（福西　1998 , 春木　1995 など）が、その場合にもその目標が満たされることで「創造価値」や「体験価値」が実現されるものと考えられる。

注意しておかなければならないのは、「腎臓を提供するか」という問いに対して「イエス」と答えなかった人が、イコール、人生からの問いかけに「イエス」と言えない人だというわけではないということである。彼らは「ドナーにならない」という選択肢に対して「イエス」と答えたのであり、ドナーにならないという人生を引き受け、生きていくことになるのである。したがって、「腎臓を提供するか」という問いに対する「イエス」、「ノー」の答えがその人の価値を決めるものではなく、それぞれが自ら選んだ人生からの問いかけに「イエス」と答えていけるかどうかがその人のその後の生き様に関わってくる

のである。

さて、話題をドナーになることを選んだ人のことに戻す。生体腎移植はドナー、レシピエントの双方がそれぞれひとつずつの腎臓で健康な生活が営めるようになることが大前提となるため、実際の移植に至る前に様々な検査や面接など心身の健康確保のための万全の体制が準備されている。よって、ドナーが腎提供を決断し、レシピエントがその申し出をうけいれることを決断してすぐに移植が実施されるわけではなく、実施までにはそれ相応の時間がかかる。場合によっては数年間の年月を要することもある。その間に、健康状態や適合性の問題によって移植ができないことが判明する場合がある。或いは、検査の負担が大きくて一度は固く決心していたドナーまたはレシピエントの心に迷いが生じる場合もある。ドナーになることを申し出た人はなべて「自分の意思で決めた」と言うし、そう言いきれる者のみがドナーになれるのであるが、その自発性の陰に周囲からの無言の圧力や家族内葛藤などの諸問題が隠されていて、そのことに本人すら気付いていないこともあり得る。また、一時的なヒロイズムが自発性を表面に押し上げ、意識から閉め出された不安やためらいに蓋をしてしまってドナー本人もその存在になかなか気づかない場合もある。移植後のレシピエントから「あんなにたくさんの検査をされて、ドナーがいつ決意を翻すかとひやひやした」などという声がきかれることもある。本来、この段階での翻意があり得ると考えられるのであれば、ドナーの揺るぎない自発性という前提条件に疑問符がつけられ、移植の遂行の可否にも大きく関わるところであると考えられる。いずれにしても、移植を待つ期間は、一旦「イエス」という決断を下したドナーに幾重にも問いかけがなされ、ドナーは自らの人生と向き合って答えを出していくこととなる。

このような過程を経て、なおも自らの人生からの「ドナーになる自信はあるか」、「腎臓提供の決意は本当に自発的なものか」との問いに「イエス」と答えることのできるドナーのみが手術台に上がることとなる。

移植が成功し、レシピエントの健康状態やQOLの向上という当初の目的が果たせたとき、ドナーは想像価値、体験価値を実現させたこととなる。移植

後のドナーからは、「とにかくやってよかった」、「レシピエントの回復が目を見張るようで嬉しい」、「（レシピエントと）お互いが喜びあってるみたい」といった喜びの声が聞かれる。自らの腎提供という行為が望ましい結果をもたらしたことで、ドナーは自らの選択を「イエス」と肯定することができる。また、レシピエントや他の家族からの感謝の言葉、或いは周囲の人々からの賞賛など、他者からの承認によって、ドナーは自らの行為への自信を深め、「イエス」と肯定するに至る場合もある。

しかし、容易に「イエス」という結論に達しえない場合もあるし、或いは、一度は「やってよかった」と自らの行為を肯定しながらも、後から疑問を抱いたり、肯定を否定に転じたりする場合もある。移植した腎臓が期待していたほどうまく機能しない場合、拒絶反応を起こして短期間で機能廃絶となってしまう場合、レシピエントから感謝の意が示されない場合など、ドナーは自らの臓器提供という犠牲的行為の結果に失望の念を抱きかねない。移植後の自らの体調がすぐれない、どうしようもない不安にさいなまれながらも身近に相談できる人がいない、といった苦悩を背負いこむことになるケースもある。このような場合に、自らが「イエス。私が自分の意志で腎臓を提供します」と肯定した決断が正しかったかどうかを自分に問い直し、ここで自らの運命に「ノー」という答えを出すドナーがいるのは想像に難くない。

ドナーになったこと自体はドナーにとって全くの不可避の運命ではなく、自らの犠牲を覚悟の上で、何らかの目的をもって自分の意志で決めたことであったはずである。しかし、一旦腎臓を提供すると、ドナーになったという事実は変えようがなく、摘出した腎臓を元に戻すこともできない。腎提供後に、提供前には予想しなかったような、ドナーにとって好ましくない事態が展開することもあろうし、ドナーの期待どおりの成果が得られない場合もあろう。ドナーが何らかの目的や希望をもって選択したはずの運命が、あるいはドナー自身の努力や才覚、忍耐の及ぶ範囲になく、また、「なぜ」と問いかけても答えが出ないような理不尽としか思えないようなものに変容していることもあり得、そこでドナーが容易に自分の人生に「イエス」とは言い難い状態に至る場合もあ

る。レシピエントとの共生関係の強化を期待していたドナーが、元気になって外の世界に飛び出していってしまうレシピエントをみて、孤独感やとりのこされた感を抱いたという話をしばしば聞く。「透析中は何かと頼ってきていたレシピエントが、元気になった途端によりつきもしなくなった」、「元気になったら一緒に旅行をしようねって約束していたのに、レシピエントは友だちと出かけてばっかり」、「せっかくあげた腎臓を（暴飲暴食を続けるレシピエントが）大切にしているとはとても思えない」、「みんなはレシピエントにばかり『大丈夫？』っていうけど、私だって痛かったし、もっと大事にしてほしい。だけど、レシピエントに罪悪感をもたせるわけにはいかないから、自分から『痛い』とは言い出せない」、「移植後、健康に自信がなくなった。疲れやすくなった気がする」といった失望や不安といった苦悩の声が、ドナーの体験談の中から抽出された。

しかし、筆者がこれまでに会ってきた数十人のドナーの中に、自分がドナーになったことについて百点満点をつけることはしない人や、疑念の余地がある人はいても、完全に「ノー」という答えを出した人や、「やらなければよかった」という後悔の念を表した人は殆どいなかった。あてにしていた結果を得ることができず、思いもよらなかった苦悩を引き受けることになった、という話をする人はいる。人は「それでも人生にイエスと言う」存在だといえるのであろうか。

次章では，筆者が行なっている生体腎移植の患者を対象としたインタビュー調査のうち，夫に腎臓を提供した女性Aさんの事例を用いて，人が「人生にイエスと言う」ことについて考察を試みる。この調査は，移植医と筆者の協議の上，移植後のドナーとレシピエントの双方の心身の状態に大きな問題がないと移植医が判断をした患者を対象としており、Aさんからは，研究目的での情報の公開の了承を得ているが、プライバシー保護のため、事実の一部に改変を加えている。

IV. 事例：Aさんの場合

事例中，「　」内はAさんの発言，『　』内はその他の人物の発言を示す。

1. 事例の概要

Aさんは50代後半女性。自営業を夫と共に営んでいる。インタビューの約1年前に夫（移植当時60代前半）に腎提供。当時の同居家族は夫のみ。既婚の長男（30代前半）、長女（20代後半）が近隣に住んでいる。

Aさんは地方の「集落をまとめるような」裕福な家で「わがまま放題」に育ったが、多くの人が家に集まってくるのが嫌で高校卒業後、親戚を頼って都会に出て事務の仕事をしていた。そこで出会った現在の夫の「アプローチがすごくて」20代前半時に「流れるごとく」結婚したが、「物事を深く考えない」夫とは結婚当初から価値観が合わなかった。「夫婦は最も他人。交わることはない」。しかし、「私らは移植したために交わってしまった」。

頑健だった夫が10年前に高熱を出して病院に行くと、「すぐ透析が必要な状態」となっていた。その約1年後に透析を開始。2年前に夫が透析病院で移植の情報をきいてきて、家族全員の前で『どう思う？』と話を切り出したところ、長男が『自分のをやる』と言い出したので、Aさんも「簡単に、私も、と言ってしまった」。すると夫が「それをぱっととってしまって」、Aさんが腎臓を提供することに「決まってしまった」。夫も子どもたちも妻であるAさんがドナーになることを「当たり前」のように考えており、話は「とんとん拍子に進んだ」。

Aさんの腎臓摘出手術は内視鏡で行われた。医師の事前の説明では『簡単に済む』ということであったが、手術後は今までに経験のない痛みと身動きのとれないだるさで「大変」だった。家族からのサポートは「あったんでしょうけど、気がつかないですよね」。Aさんの支えになったものは長男が学生時代に事故にあって生死の境をさまよった際に出会った宗教への「信仰」であった。

移植は「成功」し、夫は元気になり、家業の経営状態もよくなった。「信仰」に「相手に喜んでもらえる生き方をすべし」、「難儀は夫婦仲の悪さからくる」

という教えがあり、腎提供は「やってよかったんでしょう、きっと」。また、移植をしないで夫が死んでしまっていたとしたら、「試練がきたときに、そこに結びつけるかもわからない」し、「子どもたちに『お母さん、元気やったんやからやっときゃよかった』と思われるのも嫌ですよね。（中略）だから、いい人生の選択をしたんじゃないかな」。

しかし、「簡単に考えた末が、今、これ」。家族はＡさんの腎提供を「当たり前」だと思っており、夫からは感謝の一言もない。日に日に元気になっていく夫をみている自分はストレスがたまり、「そんなに元気になったんは私のおかげやんか」という思いが処理できず、「心をコントロール」するのが難しくなったし、体力にも自信がなくなった。しかし、夫が尿量、薬の時間などに「感心するぐらい」注意を払っているのをみると、「感謝の気持ちはあるんだろう」と、「ちょっとは救われる気持ち」になる。

「いろいろあった」が、移植の結果については「100点満点で満足」している。「私の役目は終わった。（中略）これ以上何ができる？」とＡさんは笑顔をみせた。

２．事例の考察

Ａさんの腎提供の決断は確かに自分から申し出たものではあるが、夫の健康状態の改善のため、ＱＯＬの改善のため、といった目的についてはインタビューの中で直接的に語られることはなかった。むしろ、最初から葛藤がありながらも「流れるごとく」結婚したというエピソードと同様に、深く考えることなく「簡単に」イエスと言ってしまった結果、周囲の状況に流されるように「決まってしまった」というニュアンスが強調されている。しかし、ドナーになることを申し出たＡさんの行為には、「最も他人、交わることはない」夫婦が移植という決定的な形をとって「交わる」行為であり、Ａさんが理想とする夫婦像に近づくための究極の手段としての意味があったのではなかろうか。最初に「簡単に」「言ってしまった」瞬間にはそのような意識は含まれていなかったにもせよ、その後、Ａさんが自らの決断を正当化するためには意味づけ

や目標が必要であったことが推察される。

しかし、夫婦が「交わる」はずのAさんの腎提供という行為は、結果としてAさんの心を夫からより離してしまう方向に導いている。夫や他の家族からの感謝やねぎらいの言葉もなく、日に日に元気になっていく夫の姿を見てストレスがたまると話すAさんには満たされぬ思いがある。よって、Aさんが自らの腎提供という犠牲的な行為に対して意味を問いかけるならば、Aさんが確信を持って自分の選択を「イエス」と肯定できるような実感を伴った答えは返ってこなかったものと考えられる。多くのドナーが腎提供の第一の目的をレシピエントの健康のためと語るが、Aさんにとっては、移植後、日に日に元気になっていく夫の姿を見ることが自らのストレスの原因にさえなっているという。

Aさんの語りは、Aさんの失望、苦痛、孤独といった苦悩の色合いが濃い。しかし、Aさんは自らの決断、行為を「ノー」と否定しているわけではなく、「100点満点で満足」していると評価している。そう思わなければやっていけないという自我の防衛機制が働いての発言であるともいえよう。しかし、Aさんの「私の役目は終わった。（中略）これ以上何ができる？」という言葉は印象的である。自らの人生からの問いかけに対して、自分の役目を選び取り、その責務を果たした人の言葉である。つまり、Aさんは人生に「イエス」と言っているのである。それまで、地方の裕福な家で「わがまま放題」に育ち、「流れるごとく」結婚し、家族の意見や信仰している宗教の教えに流されるように生きてきたAさんが、他者や人生に結果や答えを求めるのではなく、人生から自分に向けられた問いに向き合って、能動的に応答する責任を果たした瞬間であったといえる。しかし、Aさんが失ったもの、得られなかったものはあまりに大きく、「100点満点で満足」と評価している割には「満足」の実感が伴わず、自らの人生に対する「イエス」という答えの意識化に至っているとはいえない。思い通りの結果が得られないときや、自分の力ではどうしようもない災厄にみまわれたとき、人はその意味を求め、葛藤し、苦悩する。Aさんも今はまだその苦悩のただ中にいるものと考えられる。しかし、運命の理不尽さに気づき、苦悩に翻弄されるのではなく、苦悩を苦悩として引き受けて生きていく

ことができるようになれば、もう一度、今度はもっと力強く、自らの人生にイエスと言えることであろう。

V．まとめ

前章では事例を通じて、ひとりの生体腎移植のドナーが「人生にイエスと言う」ことについて論じた。Aさんというひとりの人の1回きりの腎提供という行為を通しての人生に対する答えであるが、同じ「イエス」という肯定の答えであっても、その意味合いは、時間の経過や状況の変化などに応じてさまざまに変容しうることが確認できた。

人が人生や運命の意味について問題にするのは多くの場合、我々が大きな苦悩に直面したときである。苦悩に直面すると、まずはできる限りの手段を講じてその苦悩の解消または軽減に努める。生体腎移植のドナーは、家族の一員の腎不全という理不尽な運命を前にして、自らの腎臓を、広い意味では自らの運命を差し出した人である。「レシピエントの健康のため」などと後から意味づけされる場合も多いが、最初の瞬間はおそらく言葉にできる意味や意志よりむしろ、そうせずにはいられないような超越的な力がはたらいているものと考えられる。Frankl は次のように述べている。

> 人間は、答える存在、答えなければならない存在です。人間は、ことばによって答えるのではなく、行為によって、責任ある行為によって答えます。それは、人間が問われている存在だということです。そして、人生のどの状況も一つの問いであるということです。(Frankl 訳書 1997, 128 頁)

生体腎移植のドナーは、ドナーになるという決断を下す、腎臓を提供するといった責任ある行為によって、人生からの問いかけに応答しているといえる。しかし、その後の展開によっては、その行為の意味や結果といった答えを求め、迷い、苦悩する存在ともなりうる。ときには運命の圧倒的な力にねじふせられそうになることもあろう。しかし、理不尽な運命に問いかけてその意味の

全容を知ろうとすることの限界に気づき、苦悩を苦悩として受けとめることができるようになったとき、ドナーは再び人生にイエスと言えるのである。

以上、本稿ではFranklの論を援用して生体腎移植のドナーが自らの選択や行為をいかに肯定していくかということについて論じてきた。ドナーと話していると、「病院ではドナーへの関心が薄い」、「ドナーの声をもっと聴いてください」といった批判をうけることがたびたびある。本稿で展開した論がドナーの心のケアの一助となることを願っている。

付記：関係者のプライバシー保護の観点から、本稿中の事例の引用は差し控えてください。

VII. 参考文献

安藤勝久，尾崎紀夫．1990.「腎移植と家族関係」『臨床透析』Vol.6, No.9, pp.1299-1304.

Frankl, V.E. 1947. "…Trotzdem Ja zum Leben sagen" 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社　1993.

Frankl, V.E. 1977. "Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager", …trotzdem Ja zum Leben sagen. 池田香代子訳『夜と霧』みすず書房　2002.

Frankl, V.E. 1984. "Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee." In Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie002E 山田邦男、松田美佳訳『苦悩する人間』春秋社　2004.

Frankl, V.E., Kreuzer, F. 1986. "Im Anfang war der Sinn—Von der Psychoanalyse zur Logotherapie". 山田邦男、松田美佳訳『宿命を超えて、自己をこえて』春秋社　1997.

福西勇夫．1998「一枚の絵に映し出された生体腎移植患者の心の裏側」.『現代のエスプリ』Vol.371, pp.192-211.

春木繁一．1995.「腎移植にともなう精神医学的問題—日本の移植医療における場合」『現代のエスプリ』Vol.340, pp.89-100.

Hilton, B.A., Strazomski, R.C. 1994. “Family decision making about living related kidney donation.” ANNA Journal, Vol.21, No.6, pp.346-355.

Jung, C.G. 1939. “Bewusstsein, Unbewusstes und Individuation”, Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, XI-5, pp.257-270. 林 道義訳「意識，無意識，および個性化」『個性化とマンダラ』みすず書房 1991, pp.49-70.

Jung, C.G. 1952. Antwort auf Hiob, Rascher Verlag. 林 道義訳『ヨブへの答え』みすず書房 1988.

神谷美恵子．2004.『生きがいについて』神谷美恵子コレクション　みすず書房

川戸 圓．1998.「境界例の心理療法 1　ユング派」．山中康裕，河合俊雄編.『境界例・重症例の心理臨床』金子書房　1998，pp.34-46.

森岡正博．2000.『増補決定版　脳死の人―生命学の視点から―』法藏館

日本移植学会広報委員会編 . 2013.「臓器移植ファクトブック 2012」

山田邦男．1999.『生きる意味への問い――V・E・フランクルをめぐって』佼成出版社

山本典子．2010.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察　―グリムのおとぎ話『七羽のからす』をとおして―」『Humanitus』Vol.35, pp.39-49.

山本典子，高原史郎．2010a.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察Ⅰ　腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.157-162.

山本典子，高原史郎．2010b.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察Ⅱ　腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.277-282.

山本典子．2011.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察　―C.G.Jung『ヨブへの答え』をとおして―」『Humanitus』Vol.36, pp.23-33.

山本典子．2012.「医療の現場における臨床心理学の研究について―生体腎移植に関する研究における一考察―」『Humanitus』Vol.37, pp.39-52.